



幕末維新書留

慶應元年五至七月

慶元 二月十七日

服部文庫  
イ17  
2189  
26



117 特  
2189  
26

前尾が長手連ふ



毛打は後文に於て容易に全るべきに悔悽の辨も母之歎也  
流石代り遊 清を春分作出古て少くは成り此は山並み  
山嶺は道なり 後手長手連ふ 清を春分作出古て少くは成り此は山並み  
人白く金糸帯を清濁もふり物なり好む物也 明く清濁連  
衆を安んず 清濁は是なり此は道なり好む物也 明く清濁連  
信長也 衆を安んず 清濁は是なり此は道なり好む物也 明く清濁連  
重くはる 清濁は是なり此は道なり好む物也 明く清濁連  
比西の山に安んず 清濁は是なり此は道なり好む物也 明く清濁連  
清濁は是なり此は道なり好む物也 明く清濁連

服部文庫  
117  
1990  
3063

5-45

1-2



以是令涉石運使

元統元年御極令旨曰乃在御極百之八年中予在位

五年之久御極之中予通暴虐使少中令予之言使將

御極政事且蒙中令行其事 躬念之在位極之人言極動

以之曰使 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

同予之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

御極之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

御極之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

御極之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

御極之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極

朝廷之御極也 朝廷之御極政事且使之言亦予之御極







此書は公卿の御前書に記す所人今市使等より公卿の御前  
一程一事に多し一町致急進の法に御中召受て之に御前  
書法に上御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所

唐貞元五年正月

惣連名

右之通

儀定

今般高兵部之儀  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所

之儀一水に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所  
御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所御前書に記す所

法事

平川新眼寺門前

近江  
権之部



慶應三年壬午六月廿三日

五月廿三日 日京都出立同日伏見着同夜延船を以て坊へ下りて同

所船名を片舟名方より一舟名相違ふ兵庫船名を以て越船待た

同十日長崎より兵庫へ便船を乞同不出帆地は船名より同

于上より廿八日津浦横敷見分仕込處儀天守側より山左より舟名

人志小討子舟より田組也鳴りて舟より人救舟側より別れ右

廻り舟より十人舟より舟へ上り舟中より舟下より舟より舟より舟

合元船名を以て馬名

一 翌年甲午下舟より大津往水より舟名を以て段段役舟名を以て

舟名を以て儀舟名を以て此舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て

川定舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て

細川右舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て

舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て舟名を以て

服部文庫 117 1290 4664









甘日農ニ夕ツテレハ  
 三ツケル  
 但十二換  
 廿換  
 能子右三人と海着く春日夫人支佛其業西人業但取較隔  
 五く越れ中の中事

射是状

水家資銀平抄と云  
 杉平藏守及春日川  
 五換  
 一拾及春日川

押込  
 三三備

浪人

湯本多の二物  
 五平二  
 一拾及春日  
 浪飯  
 五平二  
 日  
 八平  
 六井二備守及春日  
 一十七  
 浪田  
 三平  
 村上忠右  
 三平  
 倉田陣  
 三平  
 倉田陣  
 三平

唐名元  
 五五月  
 65







遠くをゆく一帯の山に降りてはるかに見ゆる山に宿りて月を  
眺むる若しは不測の事我れ法人の為にも又一年の  
集り先を人の子に共の御心一其のまじりぬる  
時中宿りて上りて遊りて安んじ

丑年五月 天下にゆるり 有志の徒士

以上而改筆に携りて法務人目付役とゆへ悉く凡  
附同所役人分共各々之御心

丑年五月十日 石川近江守松平忠房  
刑部松平右近松平忠房とゆへ悉く一其のまじりぬる  
所割りて遊りて安んじ  
石川近江守松平忠房  
刑部松平右近松平忠房  
附同所役人分共各々之御心

日比谷山分 石川若狭守松 八代松平忠房 酒井右衛門松

津島守松 實 伊勢守松 栗山守松 南部若狭守松

大津守松 井上近江守松 一橋守松 小松 伊勢守松

目黒守松 松平氏松平氏松 神尾忠房守松 伊藤忠房守松

松平氏松平氏松 津島守松 若狭守松 津島守松

松平氏松平氏松 日比谷守松 栗山守松 津島守松

松平氏松平氏松 日比谷守松 栗山守松 津島守松

松平氏松平氏松 日比谷守松 栗山守松 津島守松

松平氏松平氏松 日比谷守松 栗山守松 津島守松

松平氏松平氏松 日比谷守松 栗山守松 津島守松

松平氏松平氏松 日比谷守松 栗山守松 津島守松











古社後史年

巢内 戎部

本名之結正杖

近所伝承

右社傳在城門大切處也

西院取

十平寺南門人

山崎 全右衛門

右社傳在寺中由山崎氏傳來也

山崎 三右衛門

少左衛門

右社傳在城門大切處也

古社傳在寺中由山崎氏傳來也

住持高木氏也

古社傳在寺中

古社傳在寺中

巢内 唐多院

近所村伝承

西院流字也

潮川 大守

右社傳在寺中由山崎氏傳來也

子孫傳在寺中由山崎氏傳來也

右社傳在寺中由山崎氏傳來也

又社傳在寺中由山崎氏傳來也

古社傳在寺中由山崎氏傳來也

一社傳在寺中由山崎氏傳來也





一 國司日吉川中流に於ては  
御祭神に奉りて

一月晦

沖津音

古川此

九月晦

松神降几命

御祭神に奉りて

大坂音

國司日吉

松年能降降

二月四日

松年去所守

二月朔日

午日來女心

二月音

竹馬備前降

一 枵殿

因別名一人

無別名一人

無別名一人

一 高二月三日 大坂音

高二月三日 大坂音

二月朔日

酒井長政守

其後... 見... 下... 全... 守... 是



六月十七日

山中山房

一 毛利太盛父子御河原氏 津州春上地有山房之在少園  
以之し先津州御河原氏之去十二子海産在秋至今有在  
春上地有山房之在少園中

六月十七日 百思

少盛系子紅丸

服部文庫  
117  
1290  
\*877

本不南到十

青木源右衛門

同不

石川又右衛門

安名武田伊織

津田左衛門

二年六月



六月十七日 津田源右衛門

内通証

三月十日

安名武田伊織

布不山梅村

什務録天科理

小倉虎

長坂治

二年三月

五年三月十日 大城八平  
社奉行取由三月十日

6日

右田人居住

幸奈麻

秩方麻

二十一年

當時新徵賦

之宅持

二十一年

轉田

二十一年

服田

二十一年

小田

二十一年

五稅

元新徵賦

固田

有藏子

丁

此老翁為村根津志原町新七居屋是年六月根津其  
門門口中安宿布美八酒井左馬尉候御中  
之者兵富丑三月廿日新喜系江戶以一丁目和泉屋中  
屋中押込不容易海盜攻是受此種押索之目因款不殘  
此小之也

新喜系江戶一丁目

和泉屋中藏

全三拾兩外雜扣再為大小

小笠原左衛門守家

一 辰京史系表當今進不官易形勢押傷山有入平善

前代史中儀例中、後、果、十、方、等、不、得、止、年、此、年、以

所仁、五、右、中、右、等、洋、儀、金、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、

以前右形、子、所、金、速、相、信、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、

之、月、再、無、進、形、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、

也、水、知、右、形、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、

滋、難、亦、信、美、也、入、平、相、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、

朝、言、相、也、不、他、事、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、

如、五、月、也、也、於、也、不、表、揚、也、 所、甘、新、之、所、建、也、百、也、也、 所、進、也、



所系是より舟進と相迫る事と速に相傳金不の作れり人  
何れと申す方々  
所成元より舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり  
舟進は舟進なり

二月九日

甲子

去七朝星玉形無九船一艘上りて舟進は長別  
舟進は長別舟進は長別舟進は長別舟進は長別

佐國の儀より舟進相成り莫吉利玉旗おと居り  
八日曉り舟帆下り舟進は長別舟進は長別

同十日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十一日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十二日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十三日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十四日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十五日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十六日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十七日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十八日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同十九日舟進は長別舟進は長別舟進は長別  
同二十日舟進は長別舟進は長別舟進は長別







小倉精從

石門四節之配

小倉孝左衛門

叔父

列子後

小倉之物

一 塚中

有土倉能由家官千治等以在塚中其後亦甚多其後亦  
乙亥歲三月葬于塚中是也

有土倉能由家此千百根者此亦守沖徑宅子瑞從等其後亦  
近月於川中安身守左倉此亦守千治後亦知仕於奉之各所之如

服部文  
11  
129  
28

6A



一 松平越前守成西宮御營法并推定代官是也改志切也  
 印部系去中言大阪沖城代松平越前守代官系以京幕末  
 夏同西宮營法友愛和泉守始少見場而留也印部心也  
 云云印部治之也中數山無修四石中下三三

松平越前守系

同日

右

- 一 十守野戰地
- 一 同車卷
- 一 西洋筒

- 一 推
- 一 經
- 一 之推三推

但目八分

右者松平越前守成西宮御營法并推定代官是也改志切也

六月十日

安藤理三序

一 此方 印通管有去月廿日私印領和河州牧方宿兼  
 之趣也 佐由名之也印部係也廿四日伏見印部并書從川筋  
 印通船相成并印領領分共印警用家本云云  
 印部通船方 印部係也廿四日伏見印部并書從川筋  
 印部通船方 印部係也廿四日伏見印部并書從川筋

三月十日

永井鉄之丞

一 此方於長河英吉利帆船一艘在東右是也其外北之通  
 一 船等

啓明丸

一長  
一幟  
帆白揮

十八間  
四間  
一本

右之通房此及...

加賀中納言内

六月

十五日

稻垣 曾

六月廿日 出大坂御殿...

將軍艦奉行

木下大内記

右物取...

一先遣...

此後...

三月廿五日

大關氏後...

出田信濃...

信濃... 痛眩暈... 何行分... 運... 并合... 形... 先加...



宗對馬

山崎東也

松平陸奥守殿  
近唐殿遠程好色葡萄在在相贈在在空曆  
年中七伏之宜村河田所不相贈砌者別成之宜河田為用住  
本例也口座在在陸奥守殿為用住也 陸奥守家為同族相  
贈之初之宜河田在在 本例遠年致送之宜河田及在在在在在在  
口甘為望

六月十九日

周防五上

松平陸奥守

人童信吉

六月廿二日

六月廿八日

村友齋

依為多

上平三人

水主八人

右之者其地或狹小洗百挺其是宗順積送賣捌及屋為備者  
傾者備不國見為部下津井村為和處在在者其在在在在  
其西之相成在在在在在在在在在在在在在在在在在在在在  
和氣中在在在在在在在在在在在在在在在在在在在在在在

六月十九日

松平海老守

本口依理助



近頃表對馬島嶼田振津其嶼田死在東井位澤三原部  
三原内振作付与言言言言言言言言言言言言言言言言  
月日言言言言言言

三月

少位頭  
杉年 少位頭 杉年

山崎重信

6-7A

服部文庫  
117  
1292  
1973



右重信建 後述少位頭 井伊掃部頭 中津川少位頭 杉年  
少位頭 杉年 少位頭 杉年 少位頭 杉年 少位頭 杉年  
少位頭 杉年 少位頭 杉年 少位頭 杉年 少位頭 杉年  
少位頭 杉年 少位頭 杉年 少位頭 杉年 少位頭 杉年

少位頭

井伊掃部頭  
少位頭

御用御用 御用御用 御用御用 御用御用 御用御用  
御用御用 御用御用 御用御用 御用御用 御用御用  
御用御用 御用御用 御用御用 御用御用 御用御用  
御用御用 御用御用 御用御用 御用御用 御用御用



右取玉許如帆... 大崎... 西凡... 機械... 右竹... 仕... 二ノリ...

杉年... 梶川... 鈴...

初... 下... 世...

山... 常...

曹... 鮮... 唯...

山... 宗... 常... 貞...

石鮮... 淳...

大... 皆... 當...

任持友人... 德隆... 甘... 仁... 通... 所... 公... 心

礼

... 序... 年... 中... 年... 月... 日... 年... 月... 日...

... 德... 隆... 甘... 仁... 通... 所... 公... 心

桂村...

本村...

... 德... 隆... 甘... 仁... 通... 所... 公... 心

廣州...

一 杉手船降り今春迄存表所 杉手船降り 杉手船降り  
 二 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 三 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 四 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 五 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り

二ツリケイ

杉手船降り  
出 別 敷 進

一 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 二 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 三 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り

三ツリケイ

大 五 杉 降 子

一 去月廿八日 杉手船降り 杉手船降り  
 二 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 三 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り

六月五

鐵田 櫻子

市中央 杉手船降り

鐵田 杉子

一 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 二 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り  
 三 杉手船降り 杉手船降り 杉手船降り

別 敷

逆尾橋 西岡橋 尾崎橋 大子橋  
 船所橋 志毛橋 杉手橋  
 大 明 橋 西 比 橋 日 下 橋  
 百 新 堀 橋

以上十ヶ所

右之通河原

右別番

右口文言

別番

織田 飛前

別番

六月朔

梅榎 榎 榎 榎 榎 榎

榎 榎 榎

右之通河原

右り

別番

織田 飛前

別番

通河原

新

川

河

河

川

川

難波

同

川

川

新

川

川

新

川

川

一

力今在防之形勢不穩... 應接... 改... 改...

三

田

布

杉年竹尾通符也

一 杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

二月十日

杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

二月十日

杉年竹尾通符也

杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

二月十日

杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

二月十日

杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

二月十日

杉年竹尾通符也  
長崎通船所並瓦之少船之長年相傳任也

二月十日



七りの古抄あり

子居越前守傳

子居越前守傳

筆之底殿子居也

和歌集

今度神宮形概其并抄重之七の巻一也苗并抄中逢群能  
抄物重之巻殿ありし物價騰貴一廿中 新親善隆中白  
川之湯入費之少為中多之是厚也 四下之湯水神居  
佛建也之抄之抄中佛日福之身之佛身之佛身之佛身  
檀石 抄七の巻中如言殿筆之巻殿中抄之也  
為之申月十日佛前書本多長信寺殿抄中抄之申月 頃田鑑  
村と書之申 押之羞光抄之申 於傳正所抄有化子抄一也  
并伝抄也

子居一

土井大隅守

服部文庫  
117  
1289  
x75

松橋子早喜成 天保九年

大綱書神御行 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半



御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

御行抄之書法神御行之書法 石月八角半

平岡丹波守

二月十九日抄

一 豐隆寺去十百卷 城守寺系群書中用滿一江月日官曉大  
城守寺是月七卷傳于午午傳上卷以所傳西金平也

二月十七日

一 豐隆寺去月十百卷 卷元依是生於年七月年 由神戶滿一江月  
比一回十九日於系群書是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

七月二日

七月三日毛也卷心可後書

大澤加賀寺

口云 神田寺在字年神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也  
神田寺在神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

神田寺在神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

同日毛也卷心可後書

永井此前者

初日神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

右同人

那寺一長全在下午會 今致神田寺中神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也  
那寺一長全在下午會 今致神田寺中神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

神田寺在神田寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

新石部寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也

大関此後書

新石部寺是月夕七卷傳大區書之卷之傳品下也







世尊此有言... 世尊此有言...

176

河井左衛門尉

一 世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...

七月四日

河井左衛門尉

一 世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...

七月五日

山口長次郎

一 十九日亥ノ二鐘

二換

一 六ホニトウノ几

同

右世尊此有言... 右世尊此有言...

七月七日

石見守

一 世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...

七月八日

河井左衛門尉

世尊此有言... 世尊此有言...

世尊此有言... 世尊此有言...







以言波社古多交相漏後不客易了中其力上直唯乞  
物之善也濟其其德以是意也思之少存名之付即日之  
不滿泥而執之者亦身者細中其交彼是也死在在實  
之程名以斗難也海兵之年批并美八一者也其  
或心不一多人教子成德者主得後中後身年以拋  
其防其言也法心其也其在得何多也其少也後甚法  
心痛思良具上 涉進夜而留中其美誠之以此切也其  
柄在汝之口死也身不再敢以家身其別紙之也其何能  
去字不通相原也造法言在板升其也信也信也信也  
七月八日  
信州良士  
福垣友平

別紙

信州良士  
福垣友平

右者初初修乃者三由言當三百中滿泥所家身福名也其造方  
其教初初依合相望其付保不望其能言其身是也暫談  
汝之修也立歸尸也其也月日又之也其造方之其教能言  
仕種之雜談其居是也內尸少交其有之由尸少其付何子  
以也其相身也其抄者子之其也其也通信別產之浪士言其  
滿泥所依也其也其也浪士其不這會合仕也其抄浪士也  
其一人其是也其打拂也其不尸也其難也其也其抄浪士也  
道之一味也其相也其也其也其也其也其也其也其也其也  
打拂也其抄浪士也其也其也其也其也其也其也其也其也  
之也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
滿泥所依也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
公儀乃其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

角金一舉一時瓦碎碎... 先年六月... 海濱有佳居... 居因志... 者氣... 才... 一... 味... 今... 建... 云...

直... 儀... 日... 一... 昔... 前... 中... 之... 偏... 六月廿九日... 阿部... 金澤... 加...

阿部... 金澤... 加...

大... 儀... 輔



別冊之通六月十三日於大坂表松前伊豆守上御座  
彼地諸家來之者戶餘百餘名此後  
小室亦幸松丸家來

七月一日

京口伴七

別紙

一幸松丸儀是月五日安志表出立因於室津公家社仕  
空以而續名回不滞私仕然多其後日而三日  
無余儀亦自追回而滞私仕廿五日辰上刻吹風  
室津少船仕因於諸所多夜津二船泊仕廿九日因不抗  
三里余系系多儀大面西風進月時被一仕海自辰中刻  
出帆仕後申以下刻位後薪津水島船仕後多因不為  
以前沖之倍私船志系多何國之私共不表分小共或  
系系相尋等其私少系船志系多何國之私共不表分小共或

幸松丸儀是月五日安志表出立因於室津公家社仕  
空以而續名回不滞私仕然多其後日而三日  
無余儀亦自追回而滞私仕廿五日辰上刻吹風  
室津少船仕因於諸所多夜津二船泊仕廿九日因不抗  
三里余系系多儀大面西風進月時被一仕海自辰中刻  
出帆仕後申以下刻位後薪津水島船仕後多因不為  
以前沖之倍私船志系多何國之私共不表分小共或  
系系相尋等其私少系船志系多何國之私共不表分小共或

四艘共支夜六皆一撥之在也中一初分世方之形無從保  
此麻之者此馬之口國之高なる也傷く馬買買一初分各處  
外系此麻之者荒れ寂相尋受是正心真安志之馬初分相尋  
ゆ白之相尋麻之者似中者之人心死仕方馬船出帆之用是  
白清長古七八人系此怪我私五艘出帆之用意仕初探子自空探見  
今五年白三日辰刻以怪我初白頭分系此居初分沖言打  
待兵在探外四艘申少至出帆仕仕方浪少中故去馬船出帆  
者亦水船中系此古四艘之船不礼也者退上陸發月代使  
度在皆三又章系為海岸繫本船不供船ヲ代代相問也初  
見交之候又之章此之者不中舟中其外供初分系油以系也  
付此章受怪我初之者多人教能細仕仕方世方之心没至仕方  
先子之系初之十日已前小倉之者系散仕仕方船付之供初人少  
馬者以口死仕仕方数万一之章八當渡地場不便利仕方本初分供初

其後後新津進奉返下之章去怪我初不被同付深系仕方  
洗初者之者口活之先等之當不怪我浪人初之者多人教能細  
仕仕方線海沖合之油以不相成候後系初分者之者中少  
仕仕方中今全寄兵隊沖合之者礼果子候初勤考仕仕方專務少  
用途之場合不及已前於沖合吏之役仕仕方何共無割  
難仕仕方新津中浦初分二夜以早便身初勤考仕仕方中少

六月十五日  
小倉系初分在系  
志乃不仕仕方



